福井県埋蔵文化財調査報告　第190集

波寄三宅田遺跡 2

― 一般国道416号道路改良工事に伴う調査 ―

2024

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県埋蔵文化財調査報告　第190集

波寄三宅田遺跡 2

― 一般国道416号道路改良工事に伴う調査 ―

2024

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序　　文

このたび、一般国道416号道路改良工事に伴って、福井市波寄町地係において、令和３年度に発掘を実施しました波寄三宅田遺跡の調査成果がまとまり、報告書を刊行することとなりました。

波寄三宅田遺跡は、平成22・23年度に大規模な発掘調査を実施し、奈良・平安時代の公的施設を窺わせる掘立柱建物群の遺構や遺物が見つかっています。

今回の調査は、過去の調査で確認した集落の縁辺部にあたります。そのため、少量の遺構・遺物の検出にとどまりましたが、以前の調査では確認されなかった範囲に弥生時代後期から古墳時代前期と考える掘立柱建物や中世の井戸を検出することができました。

今後、この調査の成果が広く公開、活用され、埋蔵文化財に対する理解をより一層深めていただくきっかけとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様から多大なご支援とご配慮を頂きましたことを、ここに深く感謝申し上げます。

令和６年３月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所長　中川佳三

例　　言

1　本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが、一般国道416号道路改良工事に伴い、令和３年度に実施した波寄三宅田遺跡（福井県福井市波寄町所在）の発掘調査報告書である。

2　波寄三宅田遺跡の発掘調査は、福井県土木部福井土木事務所の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、野路昌嗣、吉田悠歩が担当した。

3　発掘調査の支援業務は、株式会社エヌ・エム調査設計に委託した。

4　発掘調査は、令和３年11月１日から同年12月28日まで実施した。出土遺物の整理作業は令和４年４月１日から令和６年３月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。

5　本書の執筆・編集は野路が担当した。

6　波寄三宅田遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬のある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。

7　本書に掲載した遺構図は、株式会社エヌ・エム調査設計に委託し作成したものを、一部改変して使用した。上空からの写真は、航空測量時に撮影したものである。

8　本書における水平レベルの表示は海抜高(m)を示し、方位は座標北を用いた。また、X・Y座標値は世界測地系第Ⅵ系に基づく。

9　本書で用いた遺構の略記号は、次のとおりである。

掘立柱建物：SB　柵列：SA　土坑：SK　溝：SD　柱穴・小穴：SP

10　本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。

11　発掘調査に際しては、以下の機関・団体から協力を得た。

波寄町、福井土木事務所（順不同・敬称略）

12　発掘調査には、地元の方々の参加、ご協力を得た。遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理・普及グループ職員および会計年度任用職員があたった。

目　　次

頁

第１章　調査の経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 2

第２章　遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 4

第３章　遺構と遺物 …… 9
　第１節　遺跡の概要 …… 9
　第２節　遺構 …… 9
　第３節　遺物 …… 16
　第４節　小結 …… 16

写真図版目次

図版第１　遺跡　（１）調査区近景　（２）調査区近景
図版第２　遺跡　（１）調査区近景　（２）Ⅰ区全景
図版第３　遺跡　（１）Ⅰ区全景　（２）Ⅱ区全景
図版第４　遺構　（１）ＳＢ１　（２）ＳＢ２
図版第５　遺構　（１）ＳＰ１断面　（２）ＳＰ２断面　（３）ＳＰ３断面　（４）ＳＰ15断面
（５）ＳＰ58断面　（６）ＳＰ59断面　（７）ＳＰ78断面　（８）ＳＤ22断面
図版第６　遺構・遺物　（１）ＳＥ１断面　（２）ＳＥ２断面　（３）ＳＥ３断面　（４）ＳＥ４断面
（５）出土遺物

挿図目次

第１図　調査区位置図 …… 1
第２図　調査区区割り図 …… 2
第３図　遺跡周辺の地形図 …… 3
第４図　周辺の遺跡分布図 …… 5
第５図　調査区全体図（合成） …… 7～8
第６図　遺構配置図① …… 10
第７図　遺構配置図② …… 11～12
第８図　遺構図① …… 13
第９図　遺構図② …… 14
第10図　遺構図③ …… 15
第11図　出土土器実測図 …… 16

表目次

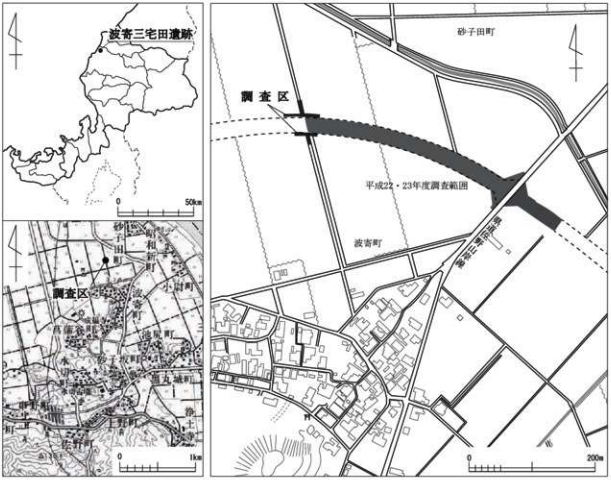
第１表　遺跡名一覧表 …… 6
第２表　土器観察表 …… 16

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯（第１図）

１　経緯

波寄三宅田遺跡は福井市の北西部に位置し、九頭竜川左岸の氾濫原に広域に展開する。遺跡は、縄文時代から近世にかけての散布地として周知されている。過去には、平成20年度（2007）の福井農林総合事務所による圃場整備計画に伴い、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文と略す）が平成21年（2008）、22年（2009）度にかけて工事立会を行い、弥生時代後期の集落や、奈良・平安時代の集落が展開する範囲を複数確認した。その後、福井土木事務所（以下、福井土木と略す）により一般国道416号道路改良工事が計画され、福井県教育庁文化課（現生涯学習・文化財課、以下、文化財課と略す）と県埋文との協議の結果、本格調査を行うことで合意し、平成22年（2010）７月～12月、同23年（2011）４月～８月に本格調査を行った。調査面積は10,670㎡である。この発掘調査では、縄文時代の川、弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓や井戸、平安時代および中世の掘立柱建物や井戸などの遺構を検出し、川からは早期から晩期におよぶ縄文土器の他、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器のほか、玉作り関連遺物や墨書土器など多様な遺物が多量に出土した。その後、同じく一般国道416号道路改良工事に伴い、国道と農道が交差する地点２カ所で工事が計画され、文化財課、県埋文と福井土木



第１図　調査区位置図（縮尺 左上：1/250 万・左下：1/50,000・右：1/6,000）

との協議の結果、試掘調査を行うことになった。県理文は、本格調査の必要範囲を確定するための試掘調査を令和元年（2018）８月８日に行い、２カ所のうち１カ所で遺構・遺物を確認し、土木事務所側に面積700㎡の本格調査が必要である旨を回答した。この回答を受けて福井土木は文化財課に本格調査を依頼し、協議の結果、令和３年度に面積670㎡で調査対応することで合意し、調査計画が確定した。

２　調査の方法

調査は令和３年（2021）11月１日より開始し、同年12月28日に終了した。調査地の現況は農道である。共用開始前の国道を境に北側調査区と、南側調査区に分かれている。調査区には世界測地系に沿った１辺10mの方形グリッドを設定し、西から東にA～G列を、南から北に１～８列を配した（第２図）。

なお、発掘調査は、調査の迅速化ならびに円滑な遂行を図るため、その業務の一部を外部に委託して行った。

第２節　調査の経過

以下に、調査日誌を抄録する。

11月４日　表土剥ぎ開始。16日終了。

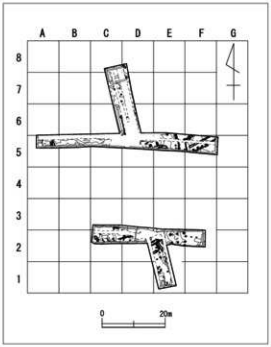
11月10日　北側調査区から作業開始。周辺整備・器材設置などを行う。

11月15日　排水路掘削。

11月16日　遺構面精査。柱穴が列状に並ぶのを確認。

11月18日　精査やサブトレンチを設定・掘削する。北側調査区の西は広く削平されていることが判明する。

11月19日　南側調査区壁面の清掃と、遺構面の精査。



第２図　調査区区割り図（縮尺1/1,200）

11月29日　南側調査区西端でSK１検出。北側調査区西端部は確認面検出作業。

11月30日　南側調査区、遺構半掘作業。北側調査区西端で溝を確認する。

12月２日　図面作成作業を行う。

12月３日　北側調査区、遺構完掘作業。南側調査区、遺構半掘作業。

12月９日　北側調査区、写真撮影のための清掃作業を行う。

11月26日　南側調査区の南端から精査。

12月10日　北側調査区の全景写真撮影。南側調査区、SE３，４の土層図作成。

12月13日　北側調査区の図面作成作業。

12月14日　SP１～３の断割り作業。写真撮影。南側調査区の全景写真撮影。

12月15日　図面作成作業。

12月16日　南側調査区の掘立柱建物の写真撮影。

12月21日　航空写真測量を実施。

12月22日　掘立柱建物の図面作成。SP１～３の完掘写真撮影。調査区内の作業終了。

12月23日　器材の洗浄。遺物の搬出。

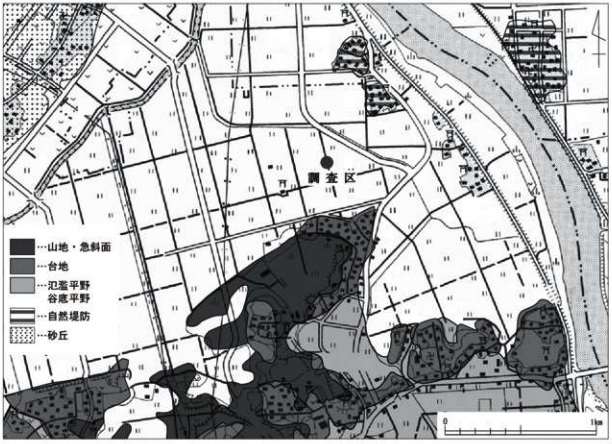
12月24日　器材撤収。事務所解体開始。

12月28日　撤収作業完了。

第２章　遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境（第３図）

波寄三宅田遺跡は、福井県嶺北地方北部に広がる福井平野北西部に位置する。行政区画では、福井市の北端、坂井市との市境近くに位置する。遺跡の北東方約１kmには、福井・岐阜県境を源とする県下最大の河川である九頭竜川が流れる。福井平野は、北部を加越台地、東部を加越山地と越前中央山地、南西部を丹生山地に囲まれる。北西部は、坂井市三国町新保から福井市免鳥まで海岸段丘である三里浜が約12kmにわたって広がり、日本海を望む。南部は越前中央山地と丹生山地の間に位置する城山、経ヶ岳などの独立丘陵および文殊山により幅が狭められ、鯖江市、越前市が位置する南越盆地へと通じている。この平野は、もとは東西の山地間が陥没した地形であったものが、九頭竜川や日野川をはじめ、足羽川、竹田川など大小の河川が供給した河川堆積物により形成された平野である。中でも九頭竜川は、永平寺町鳴鹿を扇頂とする九頭竜扇状地を形成し、扇端部になると比較的傾斜が緩くなり、標高約10m以下からは低平な氾濫原を形成するようになる。九頭竜川が日野川と合流し、丹生山地にぶつかり流れを北西に変えた辺りから左岸下流は、川西地区とよばれ、丹生山地との間に標高３～５m以下の氾濫原・三角州が広がっている。三角州と丹生山地が接する辺りには島状の小丘陵が点在し、多くの遺跡や中世の城館が分布する。波寄三宅田遺跡は、波寄町・菖蒲谷町集落が位置する半島状に突出した丘陵部の北縁裾部を含む東西方向に広がり、標高は約３mを測る。



第３図　遺跡周辺の地形図（縮尺1/25,000）

第２節　歴史的環境（第４図、第１表）

ここでは波寄三宅田遺跡周辺の、主に発掘調査が行われた遺跡を中心に記す。

波寄三宅田遺跡（第４図１）福井市波寄町に所在する。平成22・23年（2010・2011）に県埋文が発掘調査を実施し、縄文時代の川、弥生時代中期の方形周溝墓や土坑、弥生時代後期から古墳時代前期の井戸、土坑や溝、古代および中世の掘立柱建物や井戸を確認した。古代の掘立柱建物群は整然と配置され、居住集落ではなく荘園を管理する公的施設の可能性が指摘されている。川の出土遺物には、最下層から縄文時代後期初頭から前葉を中心に早期から晩期までの土器が出土し、上層からは弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器、玉作り関連遺物、木器が出土している。他に、古代の須恵器には「五月女」の墨書土器がある。

小尉遺跡（第４図13）福井市黒丸城町に所在する。波寄三宅田遺跡の南東方向に隣接する。平成24年（2012）に県埋文が発掘調査を実施し、弥生時代後期の周溝を伴う平地住居や井戸、区画溝などを確認した。主要遺構の覆土には焼土や炭が混じり、出土土器の大半が被熱していることから、集落が火災にあい、放棄された可能性が指摘されている。出土遺物には土器、石器、石製品の他、玉作り関連遺物がある。玉作り関連遺物は、施溝痕を残す未成品資料を含み、平地住居内のピットや周溝から多く出土している。

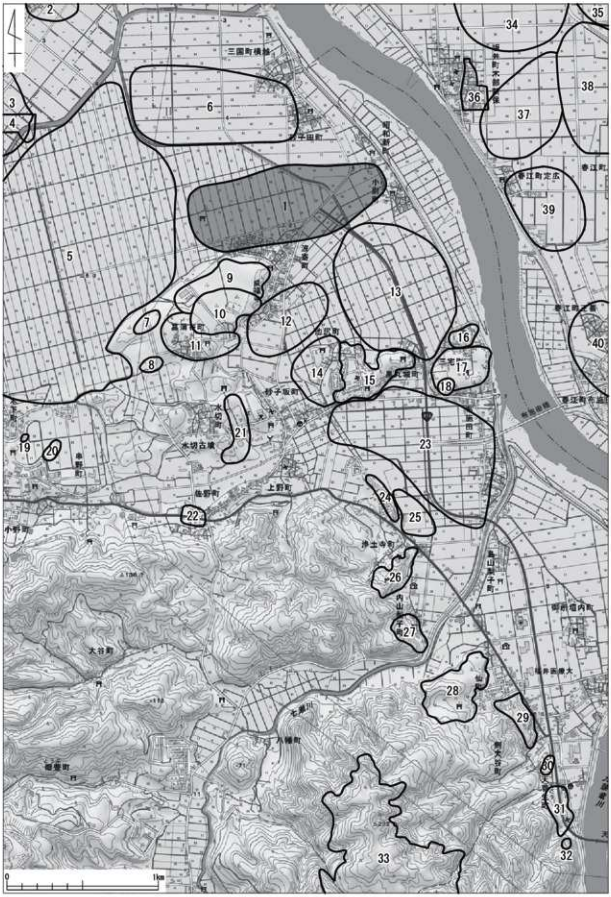
三宅古墳群（第４図16）福井市三宅町に所在する。九頭竜川左岸の独立丘陵上に位置する。昭和53年（1978）の福井県教育委員会の分布調査により、丘陵の最高地に位置する前方後円墳１基を中心に８基の小円墳で構成されることが確認された。前方後円墳（１号墳）は全長37.5mを測り、周溝を廻らすが、葺石や埴輪は確認されていない。福井市北西部における前方後円墳の分布は確認例が少なく、稀な例である。

水切古墳群（第４図21）福井市水切町に所在する。３基の古墳で構成される。６世紀後半～７世紀にかけて１号墳→２号墳→３号墳の順で構築されたと考えられている。昭和45年（1970）に福井市指定史跡となり、昭和57年（1982）には２号墳において天井石と墳丘の修復、石室内部の清掃が市教育委員会によって行われた。本古墳群出土と伝わる遺物を砂子坂町の西徳寺が管理する。遺物には、須恵器の坏蓋、坏身、短頸壺、高坏、平瓶の他、金環、勾玉などがある。

浄土寺古墳群（第４図24）福井市浄土寺町に所在する。10基が確認されており、平成14年（2001）に福井市教育委員会が宅地造成に伴い４基（７～10号墳）の調査を行った。７号墳は２基の埋葬施設を有し、その内の１基からは勾玉１点、管玉４点、ガラス玉約40点が、10号墳の埋葬施設からは剣や槍先、鏃、槍鉋などの鉄器が出土した。これらの古墳の時期は前期末～中期にわたる。

剣大谷古墳群（第４図29）福井市剣大谷町・江上町に所在する。29基の古墳が確認されており、平成４年（1992）に福井市教育委員会が剣大谷１号墳の発掘調査を実施した。埋葬施設は確認できなかったが、墳形・規模を確認し、1号墳は南北14.0m、東西12.7mを測る方墳であることが判明した。古墳に伴う遺物は出土していない。築造時期は弥生時代終末～古墳時代前期と想定されている。他に古墳築造以前の住居址３基、土坑２基を確認した。

法土寺遺跡（第４図31）福井市江上町字漆谷・法土寺に所在する。平成６年（1994）から平成11年（1999）にかけて県埋文が発掘調査を実施した。縄文時代の集石土坑、弥生時代の墳丘墓、古墳時代の群集墳、中世の寺院跡を確認し、膨大な遺物が出土した、中期古墳の22号墳埋葬施設からは頸甲、肩甲などが出土した。14世紀以降は寺院が創建され、15世紀以降、堀切や土塁など城館的性格を備えたが、



第４図　周辺の遺跡分布図（縮尺1/25,000）

火災で廃絶したとされる。

漆谷遺跡（第４図32）福井市江上町字漆谷に所在する。平成５年（1993）に県埋文が発掘調査を実施した。古墳時代前期の墳形不明の古墳１基（５号墳）と後期の円墳４基（１～４号墳）を確認した。１号墳は盟主墳と考えられ、径14mを測る。横穴式石室を有し、装身具・武器・馬具・須恵器などの豊富な副葬品が出土した。また、１～３号墳の横穴式石室は北部九州の強い影響を受けたことが窺われる。他に、13世紀後半から14世紀後半以降の中・近世墓を確認した。

木部新保遺跡（第４図37）坂井市坂井町木部新保・辻に所在する。平成21年（2009）に県埋文が発掘調査を実施した。調査面積が狭いため遺跡の性格は明らかではないが、掘立柱建物、溝、土坑、ピットを確認し、弥生時代、古代、中世の遺物が出土した。

引用・参考文献

福井県　1981『土地分類基本調査　三国』

福井市　1990　『福井市史　資料編１　考古』

福井県教育委員会　1993　『福井県遺跡地図』

福井市教育委員会　1993　『剣大谷１号墳発掘調査報告書』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2001　『法土寺遺跡Ⅰ』 福井県埋蔵文化財調査報告 第49集

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2003　『法土寺遺跡Ⅱ』 福井県埋蔵文化財調査報告 第63集

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2008　『漆谷遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告 第31集

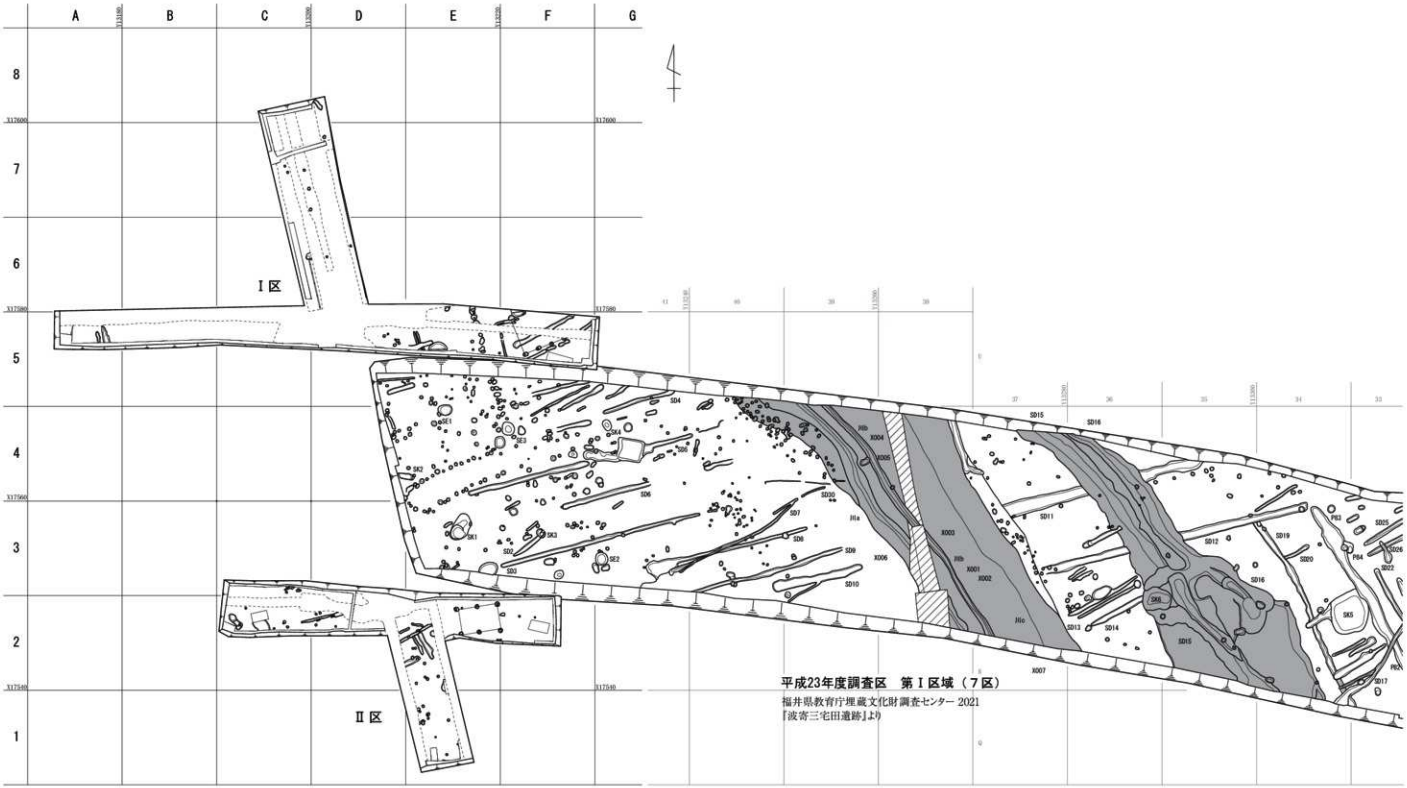
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2013　『大牧遺跡　木部新保遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告 第143集

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2016　『小尉遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告 第159集

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2021　『波寄三宅田遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告 第172集

第１表　遺跡名一覧表（№は第４図に対応）

№	県番号	遺跡名	種　別	時　代	№	県番号	遺跡名	種　別	時　代
1	01044	波寄三宅田遺跡	散布地	弥生～近世	21	01049	水切古墳群	古墳	古墳
2	08117	米納津堂ノ腰遺跡	散布地	近世	22	01050	佐野館跡	館跡	中世
3	08118	米納津石丸野遺跡	散布地	古墳・近世	23	01056	西中野遺跡	散布地	縄文～中世
4	01035	東大寺領高串荘跡	荘園跡	奈良	24	01057	浄土寺古墳群	古墳	古墳
5	01036	水切・波寄遺跡	散布地	弥生～平安・近世	25	01058	浄土寺遺跡	散布地	古墳～平安
6	01043	砂子田遺跡	散布地	古墳～中世	26	01059	内山梨子古墳群	古墳	古墳
7	01041	菖蒲谷中山遺跡	集落跡	古墳・奈良	27	01060	内山梨子城跡	城跡	中世
8	01042	菖蒲谷須岡遺跡	散布地	縄文・古墳	28	01061	仙古墳群	古墳・寺院跡	古墳・中世
9	01045	波寄古墳群	古墳	古墳	29	01062	剣大谷古墳群	古墳	古墳
10	01046	波寄城跡	城跡	中世	30	01063	大安寺古墳群	古墳	古墳
11	01047	菖蒲谷遺跡	集落跡	奈良・平安	31	01064	法土寺遺跡	古墳・寺院跡	縄文～古墳・中世
12	01048	波寄鵜田遺跡	散布地	古墳・中世	32	01065	漆谷遺跡	古墳・墳墓	弥生・古墳・中世
13	01051	小尉遺跡	散布地	弥生～平安	33	01066	電興寺跡	寺院跡	中世
14	01052	池尻遺跡	散布地	奈良～中世	34	11002	折戸四筋野遺跡	散布地	縄文・古墳・奈良・平安
15	01325	西松原遺跡	城館跡	中世	35	11009	清永茨町遺跡	散布地	弥生・奈良・平安
16	01053	三宅古墳群	古墳	古墳	36	11004	向氏館跡	館跡	中世
17	01054	三宅遺跡	散布地	縄文・古墳	37	11003	木部新保遺跡	集落跡	弥生～中世
18	01055	大黒丸城跡	館跡	中世	38	12002	辻遺跡	散布地	古墳・奈良～中世
19	01039	木下遺跡	散布地	縄文	39	12003	定広遺跡	散布地	古墳・奈良～中世
20	01040	木下廃寺跡	寺院跡	奈良	40	12004	正善遺跡	散布地	古墳・奈良～中世



0　20m

第５図　調査区全体図（合成）（縮尺1/400）

第３章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要

１　地形と層序

波寄三宅田遺跡の調査区の現況は農道である。新設する農道が国道416号バイパスと並行および交差するため、調査区の形状は、国道を挟み向かい合うＴ字状を呈する。北側調査区をⅠ区とし、幅4.5ｍ～７ｍ、南北27ｍ、東西57ｍを測る。南側調査区はⅡ区とし、幅５ｍ～６ｍ、南北20ｍ、東西36ｍを測る。遺構検出面の標高は、最も高い地点がⅡ区南側のＥ１グリッドで約2.7ｍ、最も低い地点でⅡ区西側のＣ２グリッドで約2.2ｍを測る。総面積は670㎡である。

今回の調査区は、近年の圃場整備による大規模な削平を受けたため、水田耕作土や農道盛土の直下で遺構確認面となる黄褐色土層が現れ、遺物包含層は残存していないといってもよい。また、過去に埋設したパイプラインが走り、場所によっては遺構面が大きく撹乱されている状態であった。

２　遺構の検出状況

確認した遺構は、掘立柱建物２棟、井戸４基、土坑１基、溝23条、柱穴・小穴77基である。遺構の分布状況には偏りがあり、特に東側に集中する。Ⅰ・Ⅱ区とも掘立柱建物は調査区の東側に分布する。過去の調査でも、今回の調査区のＥ・Ｆ列辺りにかけて遺構が分布する傾向があり、西側にかけて遺構密度が低くなる。溝の走る方向・規模も過去の調査区とほぼ一致し、一連の溝であるといえる。柱穴・小穴は規模が小さく浅いものが大半である。

３　遺物の出土状況

出土遺物はコンテナで１箱分である。遺物包含層はほぼ存在しないため、遺構出土遺物が中心となる。弥生時代後期の土器、古墳時代前期の土師器、古代の須恵器、中世の土師器、陶器などがあるが、ほとんどが小片で遺存状態も悪いものが多い。土器以外の木製品、石器・石製品などは図示できるほどの大きさのものは出土しなかった。

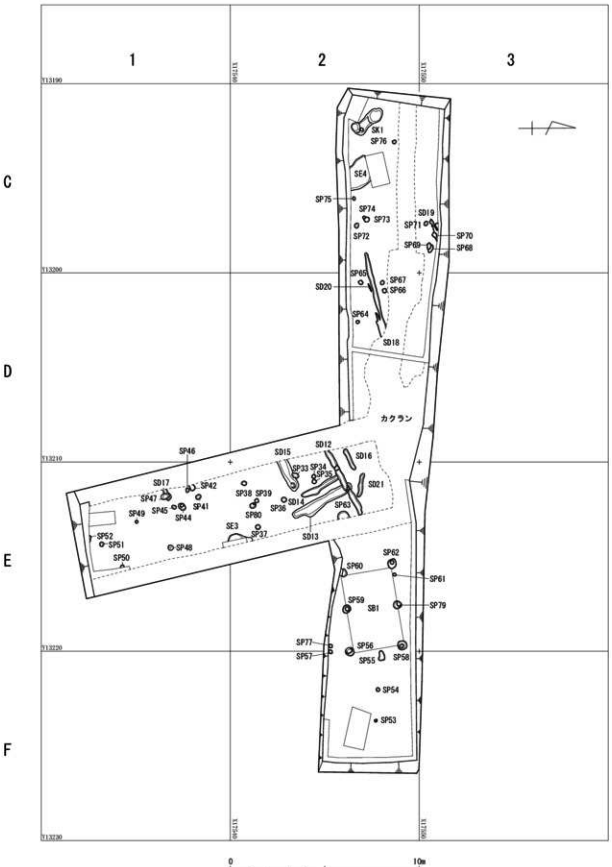
第２節　遺構（第６図～第10図）

本節では主要遺構についてのみ記す。各遺構の規模や方位などの数値は、全て遺構検出面を基準として測量図上で算定した概数値である。

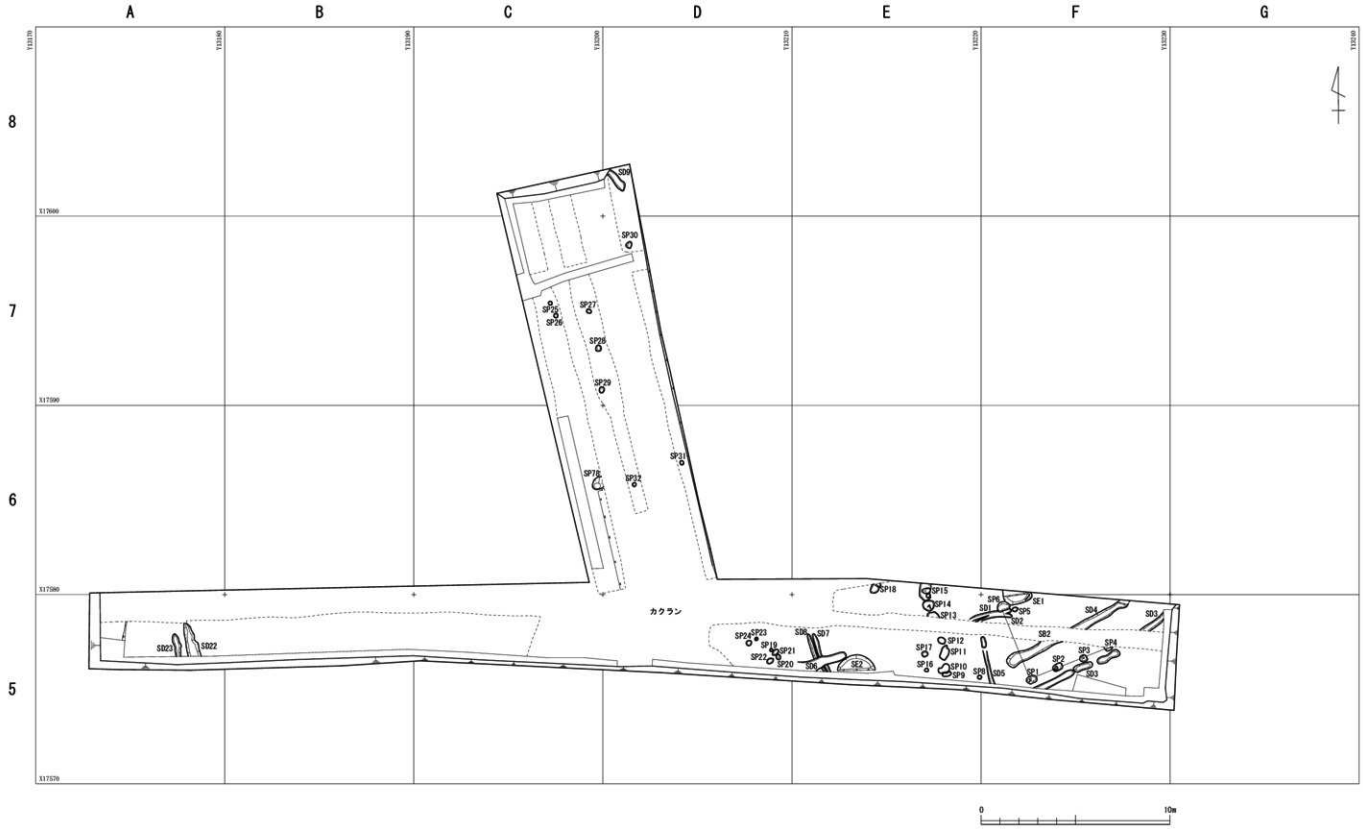
１　掘立柱建物

SB１（第８図）　Ⅱ区Ｅ・Ｆ２グリッドで検出した。２間×１間の側柱建物である。桁行4.20～4.50ｍ、梁行2.70ｍ、方位はＮ84°Ｅを測り東西方向に棟を持つ。柱間幅は桁行が2.00～2.30ｍ、梁行きが2.70mを測る。柱穴の平面形は径0.40～0.56ｍの不整円形を呈し２段に掘られるものが主体となる。柱穴の深さは0.15～0.28ｍ前後を測る。柱根は遺存していない。遺物はSP56・58・59・60から弥生時代後期と考える土器小片が出土した。柱穴の覆土や出土遺物から、SB１の時期は弥生時代後期と考える。

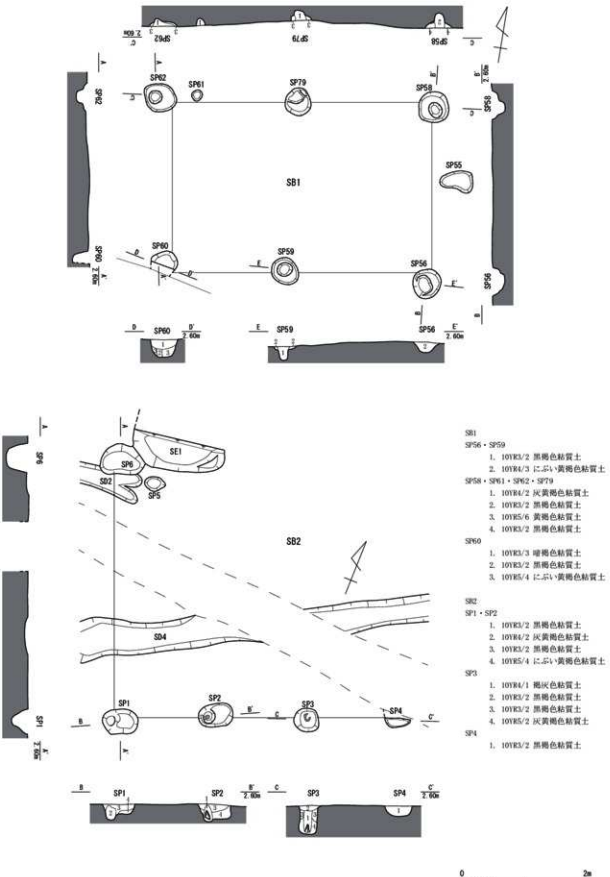
SB２（第８図）　Ⅱ区Ｆ５グリッドで検出した。推定３間×１間の側柱建物である。桁行4.60ｍ、梁行4.15ｍ、方位はＮ69°Ｅを測り東西方向に棟を持つ。柱間幅は桁行が1.50ｍを測る。柱穴の平面形は径0.30～0.70ｍの円～楕円形を呈し深さは0.30～0.48ｍ前後を測る。SP２・３には柱根が遺存していた。遺物はSP１・３・６から弥生時代後期～古墳時代初頭と考える土器小片が出土し１点を図



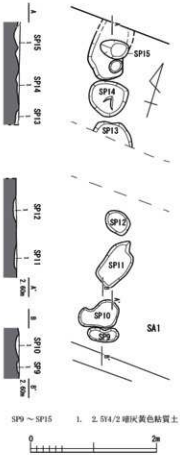
第６図　遺構配置図①（縮尺1/200）



第７図　遺構配置図②（縮尺1/200）



第８図　遺構図①（縮尺1/60）



第９図　遺構図②（縮尺1/60）

示し得た（第11図１）。柱穴の覆土や出土遺物から、SB ２の時期は弥生時代後期と考える。

２　柵列・柱穴

小穴が列状に並ぶ遺構を柵列とした。また、多くの小穴・柱穴と様相が異なる柱穴を以下に記す。

SA １（第９図）　Ⅰ区Ｅ５・６グリッドで検出した。小穴は近接し、確認長4.50 m、列の方向はＮ 20°Ｗを測る。構成する小穴は径0.20 ～ 0.45 m、深さ0.05 m前後を測る。覆土は暗灰黄色粘質土である。遺物は全ての柱穴から須恵器、土師器の小片が出土し、SP12から須恵器の蓋（第11図２）、SP15から須恵器の有台坏（第11図３）を図示し得た。古代の遺構と考える。

SP78（第10図）　Ⅰ区Ｃ６グリッドで検出した。平面形は円形を呈する。径0.60 m、深さは0.60 mを測る。土層断面から柱痕を確認した。遺物は弥生時代後期～古墳時代前期と考える土器小片が出土している。

３　井戸

井戸は４基確認した。調査区の関係で井戸全体を検出・掘削できてはいない。

SE １（第10図）　Ⅰ区Ｆ５・６グリッドで検出した。平面形は円形と推定する。確認径1.50 mを測る。湧水のため、深さは0.80 mで止めた。素掘り井戸の可能性がある。遺物は弥生時代後期～古墳時代初頭と考える土器小片が出土している。時期は弥生時代後期から古墳時代前期と考える。

SE ２（第10図）　Ⅰ区Ｅ４グリッドで検出した。平面形は円形と推定する。確認径2.00 mを測る。湧水のため、深さは0.80 mで止めた。素掘り井戸の可能性がある。遺物は弥生時代後期～古墳時代初頭と考える土器小片が出土している。時期は弥生時代後期から古墳時代前期にかけてと考える。

SE ３（第10図）　Ⅱ区Ｅ２グリッドで検出した。平面形は不明である。確認径1.20 m、深さは0.70 mを測る。素掘り井戸の可能性がある。覆土から壁の崩落があったことが窺える。遺物は中世の土師質皿（第11図４）の他、弥生土器の壺が混入している。時期は中世と考える。

SE ４（第10図）　Ⅱ区Ｃ２グリッドで検出した。平面形は不明である。確認径1.30 m、深さは0.63 mを測る。素掘り井戸の可能性がある。遺物は越前焼片の他、須恵器、土師器小片や不明板材が出土している。時期は中世と考える。

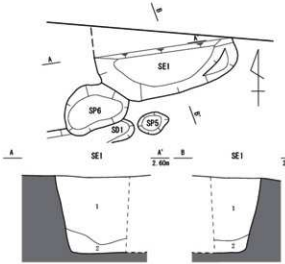
４　土坑

SK １（第10図）　Ⅱ区Ｃ２グリッドで検出した。平面形は長楕円形を呈する。長軸1.75 m、短軸0.50 m、深さは0.20 mを測るが一定しない。長軸はＮ 40°Ｗを測る。遺物は出土していない。

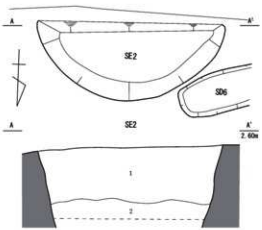
５　溝

溝のほとんどは北東から南西方向に走る。幅0.30 m以下、深さ0.10 m以下の規模を測り、覆土は灰色粘質土を呈する。これらは近世以降の耕作痕と考えるが、以下に記す溝は様相が異なる例である。

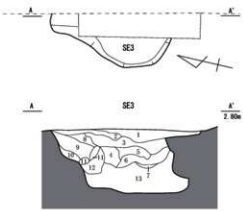
SD22（第10図）　Ⅰ区Ａ５グリッドで検出した。南北方向に延びる。確認長1.77 m、最大幅0.70 m、



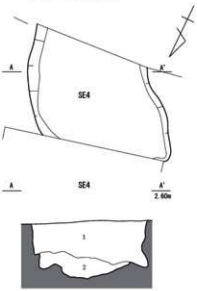
SE1　1. 10YR3/2 黒褐色粘質土
　　2. 10YR2/1 黒色粘質土



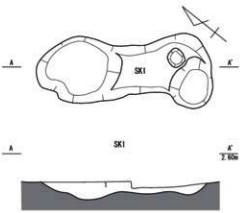
SE2　1. 10YR3/2 黒褐色粘質土
　　2. 10YR2/1 黒色粘質土



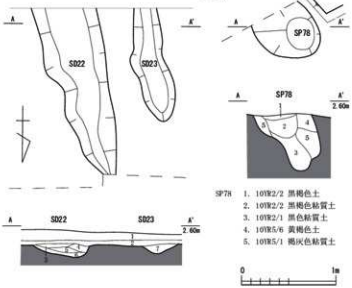
SE3　1. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
　　2. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
　　3. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
　　4. 10YR3/2 黒褐色粘質土
　　5. 7.5YR4/2 灰褐色粘質土
　　6. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
　　7. 10YR2/1 黒色粘質土
　　8. 10YR3/2 黒褐色粘質土
　　9. 10YR3/3 暗褐色粘質土
　　10. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
　　11. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
　　12. 10YR4/4 褐色粘質土
　　13. 10YR3/1 黒褐色粘質土



SE4　1. 10YR4/1 褐灰色粘質土
　　2. 10YR4/2 にぶい黄褐色砂質土



SK1　1. 10YR4/1 褐灰色粘質土



SD22・SD23　1. 盛土
　　2. 現代耕作土
　　3. 10YR2/1 黒色粘質土
　　4. 10YR4/1 褐灰色粘質土
　　5. 10YR3/1 黒褐色粘質土
　　6. 10YR3/1 黒褐色粘質土
　　7. 10YR4/1 褐灰色粘質土

SP78　1. 10YR2/2 黒褐色土
　　2. 10YR2/2 黒褐色粘質土
　　3. 10YR2/1 黒色粘質土
　　4. 10YR5/6 黄褐色土
　　5. 10YR5/1 褐灰色粘質土

0　1m

第10図　遺構図③（縮尺1/40）

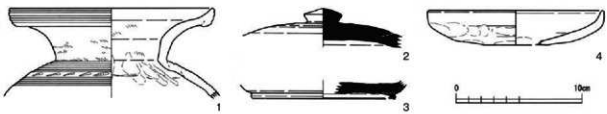
深さ0.10 m前後を測る。覆土は黒褐色土を主体とし、断面は浅皿状を呈する。遺物は出土していない。

SD23（第10図）　Ⅰ区A５グリッドで検出した。南北方向に延びる。確認長1.20 m、最大幅0.32 m、深さ0.10 m前後を測る。覆土は褐灰色土を主体とし、断面は船底状を呈する。遺物は出土していない。

第３節　遺物（第11図、第２表）

出土遺物のほとんどが小片のため、図示できるものはわずか４点であった。

１は弥生時代後期の壺である。SB ２の柱穴SP １から出土し、SE ３に破片が混入していた。幅の狭い口縁に擬凹線３条を施す。２は須恵器の蓋である。３は須恵器の有台坏である。４は土師質皿である。SE ３から出土した。



第11図　出土土器実測図（縮尺1/3）

第２表　土器観察表（第11図）　※単位はcm。推定値・残存値は（）で示す。

No	器種	グリッド	遺構	口径	器高	底径	調整 外面	調整 内面	色調	胎土	焼成	残存・備考
1	弥生土器 壺	F5 E1-2	SP1 SE3	(16.0)	(7.1)	—	口縁凹線3条　頸縦ハケ 肩横描直線紋5条沓 刺突列点	口～頸ハケ 頸～肩指ナデ	外5YR7/4にぶい橙 内5YR7/3にぶい橙	2mm以下の砂礫を微量含む	良	口縁～肩部片 器面：摩滅
2	須恵器 蓋	E5	SP12	—	(3.0)	—		回転ナデ後一方向ナデ	外内N7/ 灰白	密　3mm以下の白色粒を微量含む	やや不良	口縁を欠く
3	須恵器 坏	E6	SP15	—	(1.4)	(11.2)	回転ナデ 底面転ヘラ切り後ナデ 貼付け高台	回転ナデ	外内N6/ 灰	密　1mm以下の白色粒を多量含む	良	底部片
4	土師質皿	E1-2	SE3	(13.6)	2.8	(4.8)	口横ナデ　指押さえ	口横ナデ 指押さえ	外内5YR7/6橙	密　1m以下の砂粒を極微量含む	良	残存：1/3

第４節　小結

今回、弥生時代後期、古代、中世の遺構・遺物を確認した。調査区は広範囲に削平・撹乱が及んでおり、遺構の残りは悪く、また、調査範囲も限定的であったが、平成22・23年度の第Ⅰ区域（７区）の調査結果（以下、７区）と合わせて考えてみると、掘立柱建物を２棟、井戸を４基確認できたことは乏しいながらも成果と言える。７区川ｃ以西は、弥生時代中期の土坑墓や、奈良・平安時代の井戸の他、多くの柱穴が検出されているものの、今回の調査区の辺りは、居住域の縁辺部と報告されている。今回、遺構・遺物の内容からもそれが裏付けられたと言えよう。調査範囲の制約もあるが、今回確認した掘立柱建物は、７区の調査でも確認されていなかった弥生時代の建物であり、井戸を伴う集落が展開することが判明した。古代については、７区から続く列状に連なる小穴列があり、一連の遺構であることが判明した。また、７区では確認していない中世の遺構として、井戸（SE ３・４）を確認した。このことから、７区川ｃ以西にも、規模は不明ながら中世の集落が形成されていたことが判明した。井戸は出土した土師質皿から13世紀代後半に位置づけられる。

写　真　図　版

（1）調査区近景（西から）

（2）調査区近景（東から）

（1）調査区近景（北から）

（2）Ⅰ区全景（北東から）